

童貞で元ヤンの整備士  
に助けてもらい懷かれ  
てお付き合いしたら絶倫  
猛獣に豹変されてお嫁  
さんにされちゃうお話

体験版

なぎさ

なぎさの妄想部屋

## 第一章 困り眉の男

金曜日の夜、近道に選んだ裏路地は、湿ったアスファルトと腐ったごみの臭いがした。

「ねえちゃん、無視すんなよお。いいじゃん、一杯だけ」

「……急いでますので」

「つめたいなあ！」

赤ら顔の男が吐き出す酒臭い息が、私の頬にかかる。逃げようとする腕を、強い力で掴まれた。

痛い。怖い。声が出ない。

繁華街のネオンは遠く、誰もこの暗がりには気づかない。

（このままじゃ、まずいかも——）

男が強引に私を引き寄せようとした、その時だった。

ドカツツ!!

重い肉がぶつかるような鈍い音が響き、視界を塞いでいた男の体が宙を舞った。

まるで紙屑のように吹き飛ばされ、ゴミ袋の山に突っ込んで沈黙する。

「……いやがってんだろ、くそ野郎」

現れたのは、夜闇の中でも鮮烈に輝く金髪の男だった。

長身で、服の上からでもわかる分厚い胸板。袖から伸びる腕には浮き出た血管が走り、その拳は凶器のように固く握られている。

「あ？なにしゃがんだ、テメエ……!」

「寝てろって言ってたんだよ」

よろりと起き上がりかけた男の鳩尾に、鋭い蹴りが深々と突き刺さる。

男はうめき声すら上げられず、その場に崩れ落ちて動けなくなつた。

圧倒的な暴力。

二十代前半くらいだろうか。その瞳に宿る光は、獲物を狩る獣のように獰猛だった。

彼がゆっくりと、私の方へ手を伸ばしてくる。

「っ……！」

「——だいじょうぶですか？」

身構えた私の耳に届いたのは、拍子抜けするほど間抜けで、優

しい声だった。

恐る恐る目を開けると、そこにはさっきの殺気だった表情とは別人のような、困り眉の青年がいた。

「ちょ……血が……」

「ん？ああ、これっすか？」

彼の手の甲には、血が赤く滲んでいる。

「これはこいつの鼻血っすから！あ、やべ、汚ねえか……すんません、せつかく綺麗な服着てるのに……！」

彼は慌てて手を引っ込め、倒れている男の服でゴシゴシと血を拭き始めた。

「あ、そう、じゃなくて……！た、助けてくれて……ありがとう……  
ございます……」

「え？……いや、怪我無いっすか？あつたらあいつ、もう一発ぶん殴ってきますけど」

「な、ないです！大丈夫です」

「ならよかった。……立てます？」

腰が抜けてへたり込んでいた私に、彼は躊躇いながら手を差し出した。

「あ……ごめんなさい。こ、怖かったから……腰、抜けちゃって……」

「あー……」

彼は少し考え込み、私の隣に屈みこんだ。

「肩、貸しましょうか。俺でよければ」

「あ、ありがとうございます……お願いします……」

わざわざ地面にしゃがみ込んで私と目線を合わせてくれた、その当たり前のような仕草が、妙に落ち着かせてくれた。悪い人じゃ、なさそう。

「……。じゃあ、家まで……。送っちゃっていいですか？」

「ええ……。お願い、してもいいですか？すみません」

「いや、ちよっ……。警戒心ゼロっすね！おねーさん、大丈夫っすか？俺みたいな男に送られちゃって……。危ないっすよ」

「そんなこと言ってくれる時点で、危なくなさそうだけど……」

「わかんないっしょ！男はオオカミっすから……」

「ふふ、本当に危なそうに見えない」

私の言葉に、驚いたような顔をした彼。それから深くため息をついた。

「はあ……どうせ童貞ですよ」

「えっ！嘘?!全然みえない……」

思わずまじまじと彼の顔を見てしまう。整った顔立ちに、この体格。たくさん開いたピアス。そして少しワルそうな雰囲気。とても経験がないようには見えない。

「よく言われます……こんなに純情なのになあ。なーんか女とはどうもうまいかねんすよ……。ねえ、おねーさん俺の童貞もらってくれます?」

「ちょ……いきなりは……」

「いきなりは?いきなりじゃなかったら脈ありっすか!」

食い気味に顔を近づけてくる彼に、私はたじろいだ。

「ちよっ、こわいこわいその勢い……!そうじゃなくて、とにかく



く何も知らないのにそんなこと判断できないでしょ」

「……彼氏、いるんっすか？」

不意に投げかけられたその声は、先ほどまでの明るい調子から一転して、ひどく真剣な響きを帯びていた。見上げると、街灯の逆光のせいで彼の表情はよく見えない。けれど、その体軀から発せられる熱のようなものが、じっと私に向けられているのを感じた。息を詰めて、私の言葉を待っているのがわかる。

「いないけど……」

戸惑いながらもそう答えた瞬間だった。

彼の周りの空気が、パァッと華やいだ錯覚に陥った。隠しきれない安堵と喜びが、大きな身体全体から溢れ出している。

「じゃ、今度メシ行きましょうよ！もつと俺を知ってもらわない

と！……それくらいはいいっしょ？」

グッと身を乗り出してくる勢いに、思わずたじろぐ。怖いというよりは、そのあまりにも真っ直ぐで嘘のない熱量に、目が眩んだのだ。

「うん……というか、むしろ私にご馳走させて。今日は助けてもらったし、お世話になったから」

私がそう微笑むと、彼は目を丸くしたあと、夜の街角に響くほどの大きな声を上げた。

「わーまじか！嬉しっす！めっちゃ嬉しい！」

大きな両手を握りこみ、本気で喜んでゐる。こんなに全身で感情を表現する大人の男性を、私は他に知らない。

「あ、あのさ……名前、聞いていいっすか？」

照れ臭そうに、彼が首の後ろを搔きながら尋ねてくる。

「澄香、です」

「澄香さん……めっちゃいい名前っすね！」

彼は私の名前を、まるで何か大切な宝物を扱うかのように、舌の上で転がすように呟いた。

「ふふ、ありがとう。……あなたは？」

「俺は鉄平っつていいます」

「名は体を表すって感じね……とても似合ってる。えっと、鉄平くん、でいい？」

「なんとでも！澄香さんが呼びやすいように呼んでください！」

満面の笑みで即答する彼に、私の頬も自然と緩んでしまう。

結局、彼は「夜道は危ないんで」と、律儀に私のマンションの

玄関先まで送り届けてくれた。あんなに喧嘩が強くていかつい見た目なのに、私との間には距離を保って指一本触れようとはしなかった。

「戸締りしつかりね、おねーさん……じゃなくて、澄香さん！  
じゃあ、また連絡します！」

風紀委員のような警告を残し、彼は足取り軽く夜の闇へと帰っていった。その後ろ姿が見えなくなるまで、私はエントランスに立ち尽くしていた。

オートロックを抜け、自分の部屋に戻る。静まり返った室内で、そつと息を吐き出した。手元のスマホの画面には、先ほど交換したばかりのメッセージアプリのアイコンが光っている。ああいうタイプの男性と知り合いになるのは初めてだ。私の日常には決し

て交わることのなかった、違う世界で生きている人。

『家に着きました！今日はほんとに、澄香さんに会えてよかったっす！』

さっそく届いた彼からのメッセージには、可愛らしい犬のスタンプが添えられていた。

それを見つめていると、胸の奥で、小さくトクンと何かが跳ねるのを感じた。

前の恋愛が、酷い終わり方だったから——恋からはすっかり遠のいていた。

優也と出会ったのは、学生時代に働いていたカフェのバイト先でだった。

常連客として通ってきていた彼は、爽やかで人当たりがよく、店のスタッフからの評判も悪くなかった。ある日、シフト終わりに「よかったら今度ご飯でも」と誘われて、舞い上がってしまった。それまで恋愛経験らしい経験もなく、こんな風に誰かに「気に入られた」のが初めてだったから。

付き合うことになって、最初の数週間は夢みたいだった。

ただ、態度が変わるのは早かった。

気がつくと、デートの場所も時間も全部彼の都合で決まり、私の予定は二の次になっていた。連絡はいつも一方通行で、彼が忙しい時は何日も既読がつかないのに、私が同じことをすれば不機嫌になった。「今日忙しい」と言っただけの夜、共通の知人から、別の女の子と歩いていたという話を聞いた。問い詰めれば「お前

の被害妄想だろ」と一蹴され、何度繰り返されても抗議すること自体が許されなかった。

『重いんだよ、お前は』

『そんなんだから他に行きたくなんの』

少しずつ、心が削られていった。

私が悪いんだ。私をもっと聞き分けがよければ。私が我慢すれば。そう思い込もうとして、思い込めなくなつて、それでも別れることはできなかつた。「別れたい」と口にする勇氣すらなくなつていた。彼に否定されることが怖くて、彼から否定されない自分であることだけに、毎日を費やしていた。

限界が近かつたのを、見かねたのはバイト先の店長だった。

四十代の女性で、私の異変にずっと気づいていたらしい。ある

日「澄香ちゃん、ちょっと話そうか」と裏に呼ばれて、気がついたら全部を話していた。店長は黙って聞いて、それから「私が間に入るから、別れなさい」と言ってくれた。

優也との別れ話は、店長の立ち会いのもとで行われた。私は最後までほとんど何も言えなかった。ただ俯いて、店長が代わりに話してくれるのを聞いていた。優也は最後に「飽きてたところだったし、ちようどよかったわ」と吐き捨てて去っていった。

別れられたのに、ちつとも晴れやかじゃなかった。

別れることすら、自分の力でできなかった。あの一年間、私は最初から最後まで、自分の意思を一度も貫けなかったのだ。その事実が、別れた後もずっと胸の奥でじくじくと痛んだ。

それ以来、誰かと心を深く通わせることに、ずっと臆病になっ



ていたのだ。

けれど――。

私の言葉一つに一喜一憂し、全身で喜びを表現していた鉄平くんのあの顔を思い浮かべると、塞ぎ込んでいたはずの心がふわりと浮き立つ。

嘘のない、真っ直ぐな瞳。私を庇ってくれた、広くて温かい背中。

「……そっか。私、笑えてたんだ」

スマホを胸に当て、目を閉じる。恐怖の記憶はすでに薄れ、代わりに彼の不器用な優しさが、冷え切っていた私の心を少しずつ溶かし始めている。

彼と食べるご飯は、きっと美味しいだろうな。そんな他愛のない想像が、今はひどく心地よかった。次に会う約束が、こんなにも待ち遠しいなんて、いつぶりだろう。私は弾む指先で、彼への返信を打ち込み始めた。

初めての食事は、彼が指定した駅前の賑やかな居酒屋になった。

「ここでよかったの？」

「あー、俺あんま高級なとこだと味わかんないから、これぐらいが丁度いいんすよ。澄香さんはもっとお洒落なところがよかった？」

「ううん、私もこういうところ好き」

「……そっか。じゃあ仲間っすね」

彼はジョッキを片手に、屈託のない笑顔を見せる。金髪のいか

つい見た目なのに、笑うと目尻が下がって幼く見える。そのギャップが、妙に居心地がよかった。

「澄香さん、何の仕事してるの？」

「普通の会社員、事務とか経理とか。……あなたは？」

「親父の会社で整備士やってます。車の」

「へえ、すごいね」

「すごくないっすよ……弱小も弱小っすから。親父と俺と、あと数人しかいないような町工場なんで」

彼は照れ臭そうに焼き鳥を頬張る。けれど、その指先には落ちない油の跡があり、爪は短く切りそろえられていた。誠実に仕事をしている人の手だ。

「そんな卑下しなくても。手に職があるって素敵じゃない」

「……まー、そんなこたーいーんですよ」

ぶつきらぼうに逸らした耳が、少し赤くなっていた。

二度目に会ったのは、翌週の土曜日だった。駅前で待ち合わせた鉄平くんは、デニムにラフなパーカーという出で立ちで、けれどあの金髪はどこにいても目立つ。すれ違う人たちがちらちらと振り返っていく。そんな彼と並んで歩いていると、不思議なことが起こった。

「よお鉄平！久しぶりじゃねえかよ！」

大通りに出て数分もしないうちに、ヤンキー風の青年が向こうから手を振ってきたのだ。派手な柄シャツに太いチェーンのネックレス。どう見ても穏やかな人種ではないのに、鉄平くんを見た

途端、人懐っこい犬のように駆け寄ってくる。

「おー！元氣してた？車、調子どう？」

「おかげさまで絶好調よ。あん時はマジ助かった」

「だからたいしたことしてねーって。エアフィルター換えたただけだし」

男は満面の笑みで鉄平くんの背中をバンバン叩き、去り際に私に向かって深々と頭を下げた。鉄平くんが苦笑しながら「昔の連れっす」と説明する間もなく、次の相手が現れた。

「おや、鉄平じゃないか」

交差点で信号待ちをしていると、今度は反対側から声がかかった。制服姿の警察官だった。四十代くらいのも、柔和だが目の奥に鋭さのある男性。今はどこか気安い笑みを浮かべている。

「あ、小林さん。お疲れ様っす」

「最近どうだ？また面倒事起こしてねえだろうな」

「起こしてねーっすよ！俺もう真面目な社会人っすから。小林さんこそ、こないだ裏通りで猫に餌やってサボってたのチクリますよ？」

「バカ、あれは地域交流だ！まあ、元氣そうで何よりだ。……

そっちのお嬢さん、コイツは手のかかるバカですが、根はいい奴なんでよろしく頼みますよ」

「ちよ、小林さん！余計なこと言わなくていいっすから！」

警察官が笑ってパトロールに戻っていくと、私は思わず鉄平くんの顔をまじまじと見上げてしまった。

「……なんで警察官とあんなに仲良しなの？」

「え？あー……昔、俺ちよつとやんちゃしてた時期があつて。その時めちやくちゃ世話になったんすよ。何度も補導されて話してるうちに、なんか歳の離れたダチみたいな感じになっちゃつて」

「ダチつて……」

ツツコミが追いつかないまま商店街に入ると、今度は和菓子屋の店先から身なりの良い老人が顔を出した。仕立てのいいジャケットに白い髪を整え、杖をついた小柄な紳士。品のある佇まいだが、その目には独特の凄みがある。

「おう、鉄平。元氣にしてるか」

「あ、会長。どうも、ご無沙汰してます」

会長。何の会長だろう。聞いていいのか迷う響きだった。

「こないだはうちの若いもんが世話になったな。おかげで助かつ

た」

「いや、俺は別に大したことしてないっすよ。たまたま通りかかっただけなんで」

老人が去った後、鉄平くんは頭の後ろを搔きながら、ばつが悪そうに笑った。

「あー……」

「……ねえ、今の人。お父さんの工場のお客さん？」

「いや、なんか俺、街歩いてて『これほっとけねーな』って揉め事とか困り事に首突っ込む癖があつて……。そういうのやってたら、ああいう知り合いが増えてたんすよね。あの会長もその繋がりっつーか」

「……首突っ込むって、危ないことしてないよね？」



「してないっす！ただの近所付き合いの延長みたいなもんっすよ！」

ヤンキー、警察官、そして「会長」。歩くたびに多種多様な人間から声をかけられる光景に、私は軽い目眩を覚えていた。

ただ、本人には自覚がないようだが、私にはわかった。彼は誰に対しても分け隔てなく手を差し伸べるタイプなのだ。相手の肩書きが何であろうと、目の前の人が困っていたら助ける。それだけ。そして助けられた人たちが、自然と彼の周りに残る。結果として生まれた人脈が、堅気もそうでない人もごちゃまぜの、彼だけの不思議な交友関係を形作っているのだろう。

「さーて、腹減ったなあ。澄香さん、何食べたいっすか？」  
聞かれた瞬間、反射的に身体が強張った。

『何が食べたい？』

この質問が、私はずっと苦手だった。

前の恋人——優也と付き合っていた頃、何かを答えれば「えー、今日そんな気分じゃないんだけど」と返され、「優也が決めていいよ」と譲れば「そういうとこだよ。自分で決められないの？」と鼻で笑われた。どちらを選んでも正解がなくて、そのうち「何食べたい？」と聞かれるだけで、喉の奥がきゅっと締まるようになっていた。

——早く、何か答えなきゃ。

焦るほど、言葉が出てこない。俯いて、指先を握り込む。

「……ごめんなさい、えっと……」

「ん？」

鉄平くんがひよいとこちらを覗き込んできた。急かす気配はない。ただ、のんびりと私の言葉を待っている。

「……思い浮かばない、かも」

情けない声で、ようやくそれだけ絞り出した。

「お！じゃあ俺が決めちゃっていいっすか？」

顔を上げると、彼はきらきらした目で空を見上げながら、あごに手を当てて真剣に考え込んでいる。

「そうだなあ、中華とかどっすか！この先に美味しい町中華があるんすよ。麻婆豆腐がマジでやべえの。あ、辛いの大丈夫っすか？」

拍子抜けした。否定もしない。呆れもしない。ただ嬉しそうに、自分が好きな店を提案してくるだけ。それだけのことが、こんな

にも樂で、こんなにも救われるなんて。

「……うん。辛い、好きだよ」

「お！やっぱ俺ら相性バッチリっすね！じゃ決まり！」

鉄平くんは、そのままぐいっと私の手を引いた。引っ張られるままについていきながら、鼻の奥がつんとした。笑っているのに、泣きそうだった。

それから、私たちはちよくちよく食事をするようになった。生きる世界も、タイプも全然違うのに。不思議と会話が途切れず、自然体でいられる。彼からの真っ直ぐな好意に触れるうち、いつしか強張っていた心も解れていった。

彼と過ごす時間が心地よくて、離れがたく思い始めていた

頃――

「澄香さん、そろそろ俺のこと……わかりました？」

帰り道、いつもの分かれ道で彼が足を止めた。街灯の逆光で、彼の表情がよく見えない。

「えっ？」

「初めて会った時、『何も知らないから判断できない』って言ったじゃないっすか」

「あ……あの時のこと、覚えてたんだ」

冗談めかして言ったつもりだったのに、彼は真剣な声で答えた。  
「ずーっと覚えてましたよ。薄情だよなあ……澄香さんは。俺は  
ずっと待ってたのに」

「ごめんごめん、まさかあなたみたいな若い子が、そんな真剣に

考えてくれてたなんて……」

「そんな変わらないっしょ、同じ二十代だし」

「前半と後半じゃ全然違うのよ、感覚が」

「ま、澄香さんが何歳でもいいけど」

彼は一步、私との距離を詰めた。あの夜に感じた気配がふわりと香った気がした。

「……俺を、彼氏にしてくれますか？」

真っ直ぐな瞳だった。そこにはもう、ふざけた色は一切ない。

これは——私もちやんと答えないといけないと思った。

「うん……鉄平くんがいいなら」

「……マジっすかッ！うわっ……！人生イチうれしい！」

彼は子供のように破顔すると、両手を広げた。

「抱きしめていいですか？」

「ふふ、いちいち聞かなくていいよ」

「童貞っすから……」

「またそれ？」

笑いながら、私は彼の胸に飛び込んだ。固くて、温かい。彼に抱きしめられると、自分が本当に大切にされているような気がした。

## 第二章 猛獣

そして迎えた、初めて私の家に來た夜。

ベッドの端に腰を下ろした彼の背中中は、いつもの頼もしさが嘘のようにガチガチに強張っていた。間接照明だけを灯した薄暗い部屋の中。沈黙に耐えきれなくなったのか、彼が勢いよく頭を下げる。

「あー……その、よろしく願います……っ！」

「ふふっ、そんなに緊張しなくても」

「だって……初めてっすから……。澄香さんのこと、傷つけちゃったらどうしようって……」



大きな身体をちぢこまらせて震える声は、まるで捨て犬のようだ。私を路地裏で助けてくれたあの獰猛な姿とは結びつかない。そのアンバランスさが、たまらなく愛おしかった。

「そうだよ。……大丈夫、ゆっくりでいいよ」

私が微笑みかけると、彼は少しだけ顔を上げ、すぎるような視線を向けてきた。

「一応、ネットの動画とかではよく見るんすけど……」

「ちょ、ちよつと待って。あれはあくまでファンタジーなのよ。

現実が違うから……参考にしないでね？」

「そっか……そっすよね……。ごめんなさい、俺、ほんとバカで……」

しゅんと耳を伏せる音が聞こえそうなくらい落ち込んでしまう。

彼らしい誠実さに、胸の奥が温かくなった。

「その……」

彼が恐る恐る、手を私の肩に添える。指先が微かに震えているのがパジャマ越しに伝わってきた。

「キス……していいですか」

「……うん」

私がこくりと頷くと、彼はゆっくりと顔を近づけてきた。触れ合う直前、ぎゅっと固く目を閉じる彼のまつ毛が震えている。そして、小鳥が啄むような、あまりにも控えめで可愛らしいキスが降ってきた。

ちゅっ、と音が鳴りそうなほど軽い接触。

しかし、そこから先が進まない。彼はただ、私の唇に自分の唇

を押し当てたまま、どうしていいか分からない様子で固まっていた。彼の顔は限界まで赤く染まり、耳まで真っ赤になっている。

（かわいい……）

普段の私なら、自分から動くことなんて絶対はない。前の恋愛でも、基本的には相手に委ねてばかりだった。けれど、この純粹で大きな彼を前にして、私の中で何かが弾けた。

——私が、教えてあげなきゃ。

そんな得体の知れない使命感に背中を押され、私はそっと彼の首に腕を回した。そして、彼が唇を離そうとしたその一瞬の隙を突いて、勇気を出して自ら唇を割り、舌を滑り込ませた。

——これが間違いだったと気づいた時には、もう遅かった。

「あああ♡♡もう、むりい♡ぬいて、ぬいてえ……♡」  
ばちゅ♡ばちゅ♡ばちゅ♡ばちゅ♡

懇願する私の言葉など、今の彼の耳には届いていない。背後から覆いかぶさる巨大な質量。彼の下腹部が私の臀部を打ち据えるたびに、部屋中に湿った破裂音が木霊する。若い、あまりにも若くて無尽蔵なスタミナ。鍛え上げられた強靱な腰が、私の身体を強烈に揺さぶり続けていた。

「ごめん、とまれない……！ たまんねえ……澄香さんのまん

こ……♡」

「ひぐッ♡あ♡♡あ♡♡」

「きゅうきゅう締め付けてきて……全然、手でやるのと違う！」

「しょんなこと、いわないでえ♡♡♡」

狭い腔内を、凶器のように硬直した剛直が蹂躪していく。擦れるなんて生易しいものではない。内壁のひだ一枚一枚をぎりゅごりゅごりゅっ♡と力任せに挟り、私の弱い部分を的確に押し潰してくる。

「あー♡またでそ……♡またいっしょにイキましょ！」

彼が唸り声を上げ、腰の回転速度を上げた。

ドチュッドチュッドチュッドチュッドチュッ♡♡♡♡

「あっ♡あぁあぁっ♡♡♡まだ、いぐうつ♡♡♡」

逃げ場のない最奥を穿たれる衝撃。視界が白くスパークする。

ドチュンッ!!!♡♡♡

彼が咆哮を上げ、私の胎内で大きく跳ねた。ゴム越しにすら伝わる射精の拍動。

びゅっ、びゆるっ、びゆるるっ!!!♡♡♡

大量の白濁が吐き出される感覚に合わせ、私の身体もびくっぴくっ♡と痙攣し、奥までずっぷりとはまり込んだ肉竿を搾り取るように収縮した。

「くっ……はあ、はあ……」

余韻に浸る間もなく、ぬちゅう……♡と粘着質な音を立てて、彼自身が引き抜かれる。

ずぽんっ♡♡

ぽっかりと開いた穴から蜜がとろり♡とシートに垂れた。

「はあ……はあ……♡」

終わった。やっと、終わった。

手足の力が入らない。泥のようにシートに沈み込み、荒い呼吸

を繰り返す。けれど、背後で聞こえたカサツという乾いた音に、私は凍り付いた。

「えっ……ちよつと……なんで、つけなおして……」

振り返った先には、新しいゴムを口に咥え、無駄のない手つきで装着している彼の姿があった。さっきまでは、不慣れな彼のために私がつけてあげていたのに。その手つきは、やけに手慣れていて、目つきはぎらぎらと飢えていた。

「もう一人で付けられるようになりましたんで」

「いや、そういうもんだいじゃなくて……！まだするのぉ?」

「ごめん、あと一回だけ……!」

「さっきもそう言ってたのに……!」

「責任取りますから……!ねっ!」





ドチュッドチュッドチュッドチュッドチュッドチュッド♡♡♡

「ああああ♡♡♡中、もう、やらあ♡♡♡へんになるからあ♡♡♡」

「俺はとつくに変になつてますよ……一緒に変になつちまえばいい」

彼のピストンは、さつきよりも重く、深く、そして容赦がなかった。私の理性を破壊しようとするかのように、恥骨ごと打ち付けてくる。

ドチュンッ♡♡ドチュンッ♡♡ドチュンッ♡♡ドチュンッ♡♡

「ひううう♡♡もつと、ちゅよくなつてるのお♡♡♡」

「はあ……♡♡♡呂律まわらなくなつて澄香さんもかわいい♡♡♡昼間はあんなに清楚なのに……こんな顔になっちゃつて」

涙とよだれでぐしゃぐしゃになった顔を、彼は愛おしそうに覗

き込む。知り合ったばかりの彼に、こんなはしたない姿を見られているなんて――。

「いやああ♡♡はずかしい♡♡」

「はずかしくない！澄香さんのその顔、めっちゃくちゃそる！何度でも見たい！」

彼の言葉に熱がこもる。

「あ……でも……」

ふっと、空気が変わった気配がした。背筋がぞくりと凍るような、底冷えする気配が。

ずるううう……♡

彼が意地悪く、限界ギリギリまで自身を引き抜いた。入り口の粘膜がねちよお♡♡と引っ張られ、空虚感が襲う。

「他の男にはもう見せないでくださいね？俺専用、ってことで」  
その瞬間の彼の眼は——どこか狂気を孕んだ瞳をしていた。

どちゅんッッッ!!!♡♡♡

助走をつけて叩き込まれる、今日一番の強打。

「おぉおぉおっ♡♡」

「澄香さん……すきだ……愛してる……絶対離さない……」

耳元で囁かれる重い愛の言葉の数々。熱烈な愛の告白と共に、  
快楽の暴力が襲い掛かる。

ドチュドチュドチュドチュドチュドチュッ♡♡♡

「あああああああっ♡♡♡おぐう♡♡つぶれちゃうう♡♡こわ  
れるうっ♡♡」

「澄香さん、俺だけって言って?」

最高速度で奥を容赦なくえぐられ続け、私の思考は白濁の中に溶けていく。もう、彼以外何も考えられない。彼の望む言葉以外、口に出せない。

「あ、あ、あ、鉄平くんだけえ♡♡♡鉄平くんだけなの♡♡♡」  
「じゃあ、おれのお嫁さんになってくれますか？」

「なるう♡♡なるからっ、ゆるしてえ♡♡♡」

「はあ……♡約束ですよ！最後にまた一緒にイキましょ！」

「そんなにやあ……♡♡」

彼は私の足をさらに大きく開き、腰を密着させた。最奥を滅多打ちにされながら、内壁をぐりぐりと擦り上げられる。

ドチュンツドチュンツドチュンツドチュンツ!!!♡♡♡♡

ゾリユゾリユゾリユゾリユゾリユツ!!!♡♡♡♡

「イ、イクウ!!!イクイクイクっ!!!いつちやううう!!!♡♡♡」

「俺も……!!!」

彼が私の奥深くまで潜り込み、今日何度目かもわからない限界を迎えた。

どぴゅう~~~~~!!!どぷっ、どぷっ、どぷっ♡♡

膜越しにすら、さっきより激しい勢いを感じる。あふれ出るほどの熱量。これがもし生で中に出されていたらと思うと、子宮が恐怖と期待で震え上がった。

「んんっ……う……あ……♡♡」

そのままぎゅううっとうと強く抱きしめられ、濃厚なキスが降ってくる。私の体内で、まだ彼の剛直はゆるゆると脈打ち、硬さを保っていた。

「澄香さん、最高でした……！」

ちゅうう……♡♡じゅるう……♡♡ぬぷう……♡♡

「ん、あ……んむ……♡」

ねっとりした舌が口内を蹂躪し、私の唾液と彼の熱が混ざり合う。疲労と絶頂の余韻で、意識が急速に遠のいていく。

「澄香さん、大好き……♡これで、俺のもの……♡」

最後に聞いたのは、熱に浮かされた、けれど芯のあるその言葉だった。彼の腕の中に閉じ込められたまま、私は闇へと落ちていった。

カーテンの隙間から差し込む光が、瞼を白く焼いた。重い。泥の中に沈んでいるかのように、身体の節々が鉛のように重かった。

「ん……う……」

のろのろと身を起こすと、ずきりと腰に鈍痛が走った。昨夜の記憶が、濁流のように脳裏に押し寄せてくる。終わりのない絶頂、獣のような彼、そして何度も意識を飛ばした自分。

（私、生きてる……？）

恐る恐る布団をめくると、私はちゃんとパジャマを着ていた。あれだけ乱れて、最後は記憶もないのに、ちゃんと服を着せてくれたんだ。そう思って、ふと違和感を覚える。ショーツの感触が変だ。確認してみると、見事に前後が逆だった。意識のない私に、彼が一生懸命、不慣れな手つきで着せてくれたのだろうか。その光景を想像すると、あんなに酷い目に遭わされたはずなのに、口元が緩んでしまう。

「あ、起きたっすか！」

昨日の猛獣のような姿はどこへやら、そこにはいつもの人懐っこい笑顔があった。その大きな両手には、パンパンに膨らんだコンビニのビニール袋が提げられている。

「身体、痛くないっすか？……って、痛えよな。ほんとすんません」

ベッドの縁に腰を下ろすと、彼は少し申し訳なさそうに眉尻を下げて私の頭を撫でた。

「なんか作ってみようかと思ったんすけど……ろくなもん作れなさそうだから、コンビニ行ってきました」

ガサガサと袋を開けながら、彼が照れくさそうに笑う。中からは、おにぎり、数種類のパン、インスタントスープにゼリー



飲料まで、とても二人では食べきれないほどの食料が次々と出てきた。

「おにぎりとパン、どっちが好きですか？どっちが食べたいかわかんなかったんで、とりあえず目に付いたやつ全部買ってきただけです」

「ぜ、全部って……こんなに食べられないよ」

「いいんすよ、残ったのはオレが全部食うんで。……ほら、澄香さんは座ったままでいいすから。オレが食べさせましょうか？」

健気な気遣いは嬉しいけれど……そもそも私がこんなにもボロボロで動けないのは、他でもない目の前の彼自身のせいなのだ。毛布の下で少し身じろぎしただけで、腰から下にかけてズキッとした鈍い痛みが走る。昨夜、何度も何度も奥の奥まで激しく打ち

付けられた記憶が鮮明に蘇ってきた。

「……昨日はもう、死ぬかと思った」

私が恨めし気に睨むと、彼はバツが悪そうに視線を泳がせ、ポリポリと頬を掻いた。

「あー……ごめんなさいっ！まさかあんなにいいなんて思わなくって……その、暴走しちゃいました」

「本当に……本当に初めてだったの？信じられないんだけど」

「それはほんとっす！俺、嘘つかないっすよ」

彼はベッドの端に腰かけ、私の手をとって自身の頬に寄せた。

温かい。昨夜、私を貪り尽くしたのと同じ体温だ。

「でも……取っというてよかった。澄香さんが最初で最後の女っすね」

「……最後？」

「当たり前じゃないっすか。俺にはもう、澄香さん以外ありえないんで」

サラリと言われた言葉に、心臓がトクンと跳ねる。純愛のようでありながら、どこか退路を断たれたような重み。彼の手が、私の指に絡まる。恋人繋ぎよりも強く、逃げられない力で。

「……忘れてないっすよね？」

不意に、部屋の空気が変わった。温度が下がったわけではない。けれど、肌にとわりつく気配が、急にねっとり湿度を帯びた気がした。あの夜、路地裏で感じたものと同じ。そして昨夜、私の限界を無視して腰を打ち付け続けていた時と同じ気配。

「お嫁さんになってくれるって、言いましたよね？」

「あ、あれは……」

言葉に詰まる。確かに言った。けれどあれは、快樂の濁流にのまれ、許しを乞うために口走ったうわ言のようなもので——。言い訳をしようと顔を上げ、私は息を呑んだ。彼の瞳は笑っていた。けれど、その奥にある光は、獲物を追い詰め、喉笛に牙を突き立てる瞬間の獣のように、暗く、熱く、揺らめいていた。

「——約束したよな？」

「……っ」

「俺、嬉しかったなあ……。澄香さんも俺と同じ気持ちなんだって。だから、善は急げって言うし」

彼は私の抵抗など端から想定していないかのように、にっこりと微笑んだ。

「今度、挨拶行きましたよーね♡」

有無を言わさぬ圧力と共に、強い力で抱きしめられる。広い胸板に顔が埋まる。洗剤の匂いと、雄々しい彼の匂い。

「……うん」

頷いた理由が、押し切られたからなのか、それとも本心からなのか、自分でもよくわからなかった。

「やった！一生大事にする！」

子どものように喜んで、私の頭を両手で包むように頬ずりをする。さっきまであれだけ息が詰まるような圧をかけてきたのに、今は本当に嬉しくて堪らないという顔をしている。この落差が、どこかおかしくて、泣きそうにもなった。

——この人の重さは、たぶん本物だ。執着も、熱も、全部。

怖いとは、思う。それと同時に、こんなにまっすぐに「欲しい」と思われたことへの、どうしようもない安堵もある。前の恋愛で、ずっと欠けていたものが、そこにあった。

怖いのか、愛しいのか。本当にわからない。

——でも、この胸の奥がじんわりと温かいのは、嘘じゃなかった。彼の腕の中で、私はそっと目を閉じた。逃げようとは、もう思えなかった